
十二神将の戯れ

有沢 美弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十二神将の戯れ

【Nコード】

N5576E

【作者名】

有沢 美弥

【あらすじ】

十二神将の会話を描いた物。神の存在を信じるかは貴方次第。

（前書き）

これは、「神人な恋人」の番外編になっています。この話だけでも分かると思いますが、「神人な恋人」も読んでいただけると嬉しいです。

「また彼女の夢に行つて来たのか、青龍」

自室に帰ろうとしていた青龍を見かけた白虎は渡り廊下で声をかけた。

彼がこここのところ毎日、沙羅という少女の夢に行っている事を四神は少なからず察していた。

「貴様には関係のないことだ」

「まあ、そう言つな。向こうで朱雀と玄武が話していたぞ。行つて来た方がよいと思つぞ」

冷たくあたつてきた青龍を軽くのしり、白虎は笑つた。

「……しょうがない」

青龍はそう言つて、消えた。

「全くしょうがない奴だな」

白虎は、そつばやきながら自らもそこへ向かつた。

「おお！帰つて来おつたか、青龍」

黒い着物に身を包んだ玄武は青龍の気配を感じ取り、笑つた。

「そういう事は、俺が出て来てから言つてくれ」

姿を表した青龍は玄武と向き合つた。すると、朱の着物を纏つた女性はクスクス

と笑つた。

「何だ朱雀。何がおかしい」

青龍は少し不機嫌になつて言つた。

この場所は中庭と言つ言葉が一番似合う場だった。小さな池があり、鯉も泳いでいた。

「何でもないわ。ごめんなさいね」

朱雀は腰までもある長い髪を後ろに被いながらも笑っていた。すると、いきなり玄武が疑問を投げかけて来た。

「なあ青龍、朱雀：私達四神の仕事とは一体何なのじゃろうか」
唐突な質問に二人は黙り込んでしまった。

「…貴様はどう思う、白虎」

「ははあ…やつぱり気付いてましたか」

誰もいない場所から声が聞こえた。そうして、白虎が姿を表した。

「相変わらず凄い霊力察知能力ですねえ」

白虎はからからと笑いながら朱雀の隣に座った。

「気付かせないでいるつもりだったのか？」

「あら。私は全く気付かなかったけれど」

朱雀は隣に座った白虎を見下ろして言った。

「第一、白虎は気配を消すのが十二神将の中でも一番上手なのよ」

「私の質問に答えてくれんか」

朱雀の言葉が終わるのを待たずに、玄武は言った。

「私は…」

白虎はゆっくりと語り始めた。

「やはり、自然を豊かにしたり、雨を降らせたり…」

「だが、それは他の十二神将がやっている事だ」

青龍はあっさりと言い放った。そして、目を伏せた。

「正論だろう。なあ、六合、天后」

すると、伏せたままの瞳の奥から二人の女性の笑い声が聞こえてきた。

「ふふ…やはり、素晴らしいですね…青龍様は」

「申し訳ありませんね。私達が神としてのお仕事をなくしてしまつて」

目を開くと二十歳程の綺麗な女性と、十五ほどの少女が立っていた。

「仕方がないだろう。審神の言い付けなのだから。お前達が悪い訳ではない」

二人の女性を見ながら青龍は言った。

「そういえば聞いたぞ、六合。勾陣こうちんと恋仲なんじゃとな」
齡十五程の少女は頬を赤く染めた。

「あら、初耳。そうだったの？六合」

朱雀も驚いたように彼女を見た。

「俺も初めて聞いた」

青龍も興味ありげな声で言った。

「だ…誰から聞いたのですか…玄武様」

六合は真つ赤になりながら玄武に尋ねた。

「いやあ…勾陣のやつが最近機嫌がよかったもんで。何があったか聞いてみた

んじゃ」

「勾陣の馬鹿…」

六合はますます赤くなった。

「悪かったな、馬鹿で」

厭味いやみたつぷりの声と共に表れたのは、今まさに噂をしていた勾陣だった。

「ひゃあつ！！」

六合は背後からの恋人の声に盛大に驚いた。

「おー。お出ました」

白虎は手を叩いた。

「じゃあ、この際だ。全員出て来ればどうだ？盗み聞きは悪い事だ」
青龍は右手をパチンと鳴らした。

すると、今まで気配と姿を隠していた他の十二神将が表れた。中には屋根の上に乗っているのもいた。

それが落つこちで、地面に穴を開けてから、青龍は深くため息をついた。

「なんじゃあ。全員いるんじやったら、さっさと出てくりゃええがな」

玄武も腰を下ろしながら言った。

屋根から落ちて来たのは赤髪の少年、騰蛇とつただった。

「…っつい」

騰蛇は頭を摩りながら、青龍に食ってかかった。

「青龍！ お前つ永唱破棄えいしょうはきどころじゃ済まねえぞツツ！」

十二神将の中で青龍に文句を言ったり出来る人の方が少ない。

朱雀は相変わらず、笑いながら二人のやり取りを聞いていた。

「大体お前はいつも言霊だけは破棄しやがって！！こっちは抵抗のしようもねえじ

やねえか！」

「お前が盗み聞きなんかしているのが悪いのだろう」

青龍の言葉に大陰も騰蛇の肩を持った。

「青龍、騰蛇の言う通りだ。言葉を発さず術を使われてはこちらは対処のしよう

がないではないか」

「言霊全部言ってるって面倒臭いんだ」

青龍は自分の前髪をかきあげながら言った。

「あれは永唱破棄の度合いじゃねえ…」

騰蛇は文句を言った。

「あー。もうどうだっついていいじゃない」

六合がうんざりしたように言った。

「そうじゃ。私なんて、言霊が一番の苦手分野じゃ」

「それ慰めになってねえぞ、玄武」

玄武の言葉に大きく肩を落とした。

「本当に仲がよろしいですね」

十九の娘、天空が可笑しそうに笑った。

「良い迷惑だ。全く」

青龍は天空の隣に座ると玄武の方を見た。

「何じゃ？」

「酒とか持つてるか？」

「持っていないのう。しかし、珍しいの。お前が酒を欲しがるとは」
青龍はもともと酒を呑まない。苦い酒は嫌いだといつも言っていた。
反対に、酒を好む玄武をいつも体に悪いから、と言っていた。

「どうしたのですか？青龍様。いつもならお酒を召し上がるなどお
つしやりませ

んのに」

「やけ酒だ」

青龍は右手の平を上にしたまま八の字を書くように動かした。
すると次の瞬間、青龍の右手にとっくりと猪口ちよこが握られていた。

「青龍、それは禁忌の術では？」

神々の中で、何か物を出すのは禁断に近い事であった。

「問題無い」

彼はそう言っつて、酒を煽った。

「おいおい、あんまり乱暴な飲み方はよしてくれよ」

「大丈夫だ。正直、酒には弱くない」

「そう…なのか？」

白虎も驚いた。

一杯飲んだ後、青龍は右手で口元を拭った。

「なあ、天空…」

青龍は右足を立てて、俯いた。

「何ですか？」

十二神将の視線が、痛いほど二人に注目する。

「俺は男だから分からないけれど…女は好きな男の為に命を尽くす
事ができるか

？」

「え…？」

「俺がそいつの為に全てを尽くしたら、そいつも俺を信じてくれる
のだろうか…」

「

」
「そうですね…」

天空は瞳を伏せた後で言った。

「私達四神以外の十二神将は人間を主として持つ事はできませんが、大切な人の

為になら尽くす事ができると思います」

「……誰も、あいつの事とは言っていない」

そうは言いつつも、嫌そうな顔はしていなかった。

「そうですね……」

天空は穏やかに微笑んだ。

「でも……あいつは……」

青龍は両手をきつくにぎりしめた。

その時

パンツッ

「っ……なん!？」

急に頬に平手打ちを受けた青龍は驚きに目を丸くした。

また、その他の十二神将も驚き、青龍に注目した。

「何……?」

彼は自分の頬を叩いた人物を凝視した。

「情けねえぞ青龍っ!」

もしこの口調だけで判断していたら、大体の人は騰蛇だと思うだろうか。

しかし、青龍を叩いた人物はいつも物静かな白虎だった。

「お前、あいつの事はもう言わないって言ったろ!？」

「白虎……」

いつもの悠々とした白虎の口調は無かった。

「ああ……悪かった……」

青龍は白虎に謝り、十二神将のいる中庭を後にした。

痛いほどの視線の中……

「そうだな…もう、あいつのことは言わない。そのような約束だった」

青龍はある場所に向かった。

「あいつはもう居ない。死んだんだ。俺はそれを見届けた…」
そう…

最期に彼女は言った。

ありがとう

貴方は素晴らしい神様だったわ

彼女は人間だった。

そして、再び人間を主としている。

「そうだな。今度こそは守ってみせるぞ…」

青龍は誰に言うでもなく、呟いた。

大好きよ、青龍

(後書き)

神様シリーズ、大好きです。

また、もう一つのシリーズも書きたい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5576e/>

十二神将の戯れ

2010年10月9日21時17分発行